

書評

佐々木実著

「資本主義と闘った男 宇沢弘文と経済学の世界」

合田 寛

経済学のみならず奥の院にいた唯一の日本人が、68年の日本への帰国を境に忽然と姿を消し「行方不明」になった。資本主義を探求し続けてきた男はいまだ帰ってきていない。宇沢は遭難したのでは…。

本書、宇沢弘文の評伝はこう始まる。果たしてその行方を突き止めることができるであろうか、無事戻ってくるであろうか。

市場メカニズムを取り入れた社会主義実現の可能性に関する論文

宇沢は昭和3年(1928年)、鳥取県に生まれ、子供の頃から数学が得意な少年だった。一高(安倍能成校長)に入学し、河合栄次郎門下の木村健康の影響を受けた。自由主義者であった河合は軍部ににらまれ、東大を誅首、木村も東大を去る。宇沢は木村からジョン・スチュアート・ミルの「自由論」を学び、リベラリズムの思想に触れた。

東大に入り、数学科に在籍したが、上田健一郎(不破哲三)が中心となっていたマルクス主義勉強会に加わり、その影響を受け、マルクス経済学を学ぶ決意を強める。一般均衡論で均衡解を解き明かしたケネス・アローとデブリューの論文に接し、経済学に高度な数学が使用されていることに驚く。

宇沢はアローの数学モデルを使って、市場メカニズムを取り入れた社会主義の実現可能性に関する論文を書き、アローに送ったところ、55年、スタンフォード大学に招かれる。ロバート・ソロー、ポール・サミュエルソンら主流派経済学者からも高い評価を受ける。

ケインズ直系のハロッドは「資本主義の不安定性」を強調したが、ソローらアメリカ・ケインジアンはハロッドの成長理論を葬り、新古典派理論を応用し、長期的に見れば経済は均衡を回復すること、すなわち資本主義は安定性を特徴とするとの理論を導き、新古典派成長理論と呼ばれるようになった。それは主流派経済学における「資本主義観の転換」と言ってもいいほどの場面転換であった。

ケンブリッジ大学のジョーン・ロビンソンはケインズ理論を動学化するためには、マルクス経済学を介して、古典派経済学の視点に戻る必要があると確信していた。宇沢も同じ立場から、マルクスを応用して「2階級2部門」の経済を想定したモデルを構築し、一躍注目を浴びた。

門下生にジョセフ・スティグリッツ

対立の背景には資本主義における階級対立の激化があった。19世紀の終わりごろには社会対立の焦点は資本家と地主の対立から、資本家に対する労働者の抵抗に移行した。古典派は社会階級の経済的役割と階級間の利害対立を強調したが、それに対しブルジョアジーの側からは、社会階級の敵対関係から注意をそらし、個人主義を重視する経済学が要請された。

64年、宇沢はシカゴ大に教授として招聘される。当時、宇沢より16歳以上年長のフリードマンはシカゴ大

学の顔であった。フリードマンは大戦直後、ハイエクらとともに新自由主義の砦、モンペルラン協会の創設に加わり、シカゴ大学で「シカゴグループ」と呼ばれる集団を作り、経済学における反ケインズ主義にとどまらず、ニューディール以降のリベラリズムの思想そのものを葬り去るというプロジェクトを推進していた。

フリードマンはケネディ暗殺後の64年の大統領選で超保守のゴールド・ウォーターの経済顧問に就任。ゴールド・ウォーターから始まる戦後アメリカの保守運動にはじめから寄り添っていた。その後ニクソンのアドバイザーとなり、レーガンの当選に大きな役割を果たした。

宇沢はマルクス的な2部門モデルを開発した後、ソローの説得を受けてより新古典派的な2部門モデルを発表する。新古典派成長理論の創始者ソローとの討論によって、宇沢は最適成長理論に向かった。それは中央集権型ではなく市場経済を前提とした社会的な観点から最も望ましい資本蓄積の過程を考察する試みであった。それは市場経済の下であるべき社会の姿を考えてみようというものであった。

シカゴスクールの古参の一人ゲーリ・ベッカーはシュルツが開発した「人的資本理論」を、差別、結婚、犯罪などあらゆる現象を人間の合理的行動の結果とみなす潮流を生み出した。

宇沢はこうした潮流に抗し、シカゴ大でもう一つのシカゴグループを作ろうと考え、ワークショップを作った。その門下生の一人が情報の経済学を切り開いたジョセフ・スティグリッツとアカロフだ。スティグリッツは宇沢が不平等に関心を持っていたこと、また二部門成長モデルを知り、当時考えていた物理学の専攻をやめ、経済学の道に進むことを決めた。

ベトナム戦争が激しくなるにつれ、宇沢が懸念したのは、経済学者が政権に入って戦争に協力することだった。開発経済学者ウォルト・ロストウはジョンソン政権の大統領補佐官になり、ベトナム戦争の軍事作戦に強い影響を及ぼした。そのロストウを高く評価したのがロバート・マクナマラである。マクナマラはケネディ政権とともに国防長官になり、ジョンソン政権でも国防長官としてベトナム戦争を陣頭指揮した。

ベトナム戦争が転機に

マクナマラの論理は経済学の「オペレーション・リサーチ」を応用するものだった。それは組織が意思決定する時に、与えられた条件の中で最も効率的な結果を生む行動はどのようなものか、その解法を探索するもの。そもそも大戦後急速に発展した数理経済学は、戦時中の軍事研究の流れをくむという側面を強く持っていた。

アメリカ経済学会で評価が高まっていたころ、宇沢の心はずでに「アメリカ経済学」から離れてしまっていた。68年、40歳の時、宇沢は突如シカゴ大を去り東大に着任。帰国を促したのはベトナム戦争だった。

帰国後、宇沢は「社会的共通資本」の経済学を提唱する。社会に大きな便益をもたらす制度や事業であるにもかかわらず、民間では費用を上回る利益を得られない場合、資本は公共化されるべきと考える。「社会的共通資本」という概念を導入する目的は、「一国の構成員すべてがその所得、居住地などのいかににかかわらず、市民の基本的権利を充足することができるように」するためだ。

社会的共通資本の経済学は価格均衡のメカニズムを分析する経済学とは根本的に異なる。市民の基本的権利を充足するための社会的資本に焦点を絞り、どのような制度に基づいて運営・管理して維持していくのか、それを探る研究である。それを宇沢は「制度主義」の経済学の中に位置づける。

制度主義の経済学では、どのような基準で社会的共通資本を管理・維持し、そこから生み出されるサービスを分配するかという問題が、リベラリズムの観点に立って決められる。宇沢は自らの経済学を「ヴェブレン=デュイのリベラリズム」と説明する。

ソースティン・ヴェブレンは、制度学派の創始者として知られ、宇沢が「アメリカが生んだもっとも偉大なかつ独創的」と高く評価する経済学者である。ヴェブレンの制度主義の経済学は、人間の尊厳と自由を守るという視点に立って、経済制度に関する進化論的分析を展開するもので、その思想的基盤はリベラリズムにあっ

た。

リベラリズムの思想は同じシカゴ大学でヴェブレンの同僚であったジョン・デューイによって集大成され、20世紀前半のアメリカの思想形成に決定的な役割を果たした。デューイの思想は、人間を、一人一人がその置かれた環境に対処して、人間としての本性を発展させるような知性を持った主体的実体としてとらえる。一人一人が人間的尊厳を失うことなく、それぞれが持っている先天的、後天的な資質を十分生かし、夢とアスピレーションとが実現できるような社会を作ろうというのがリベラリズムの立場である。

市民の基本的権利を充足するための「社会的共通資本」

それは宇沢が若いころ学んだミルの幸福論に通じるものがある。ミルはベンサムが幸福を快樂に求めるのと違って、「人間の天賦の諸能力を可能な限り、調和的に発展させる」ことにあると考えていた。

1919年初め、第一次大戦がはじまるころ、デューイとはヴェブレンらとともに、ニューヨークに「ニュースクール」を創設したが、「ニュースクール」には、イギリス労働党に流れ込むフェビアン社会主義、あるいはそれを育てた大西洋リベラリズムの思想が反映されていた。

それはニューディールを背景とした大西洋レヴェルでのリベラル思想の一連の流れとしてとらえることもできる。大西洋リベラリズムの流れをくむ経済学者として、英国ではジョン・ロビンソン、リチャード・カーン、ニコラス・カルドア、ジェームス・ミードらがいるが、宇沢はアメリカのケネス・アローやロバート・ソローをリベラルな思想を持つ経済学者と評している。

宇沢は「社会的共通資本」の思想をヴェブレンの制度主義の考え方を具体的な形に表現したものと考えているが、その思想的根拠をデューイを中心とするリベラリズムの中に求めている。自らの経済学を「ヴェブレン=デューイのリベラリズム」と説明するのもそのためである。

さて、本評伝の読者は「行方不明」となった経済学者、宇沢を発見することができるであろうか。一貫していたのは「リベラリズム・ミリタント」の精神とその実践と言えるであろう。波乱に満ちた旅であったが、旅の最後につかんだ《青い鳥》は、少年時代にすでに手にしていたものであった。2019年 講談社刊 638 ページ 2700円(税別)